

悪風

Kaisu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

踏み外したある狩人の生涯

目次

| | |
|------------|----|
| 悪風 | 1 |
| 悪風吹き上がり | 9 |
| さよならラオートさん | 18 |

悪風

彼は概ね、恵まれていた。

そこそこに優れた頭に悪くはない顔と壮健で運動能力に長けた体に頑強な精神、運の向きも悪くはなかった。

ハンターが強大なモンスターを狩る武勇伝や英雄譚を聞かされながら育ち、また小さな街育ちであったために外への冒険心も旺盛。

彼が気の合う同郷の若者と連れ立ってハンターになったのは、半ば必然であつただろう。

果たして、彼は数多の大型モンスターを倒し、大きな怪我もなく大成した。

齢30にもなる頃には、一緒にハンターを始めた仲間とはそれぞれ別の道を歩んでいたが、喧嘩別れしたでも引退したわけでもなく、歳を重ねて少しずつ疎遠になつただけ。

倒すべき目標を見つけるか、または家庭を持つか、はたまた船の護衛ハンターとなるか、少しずつ少しずつ独り立ちしていった。

彼も家庭を持ち一児を設け街にそこそこに大きな一軒家を購入し、成功した側にいる名うてのハンターとして充実した日々を送つていた。

甘い新婚生活。そして妻の腹が大きい間。子供が赤子の間には大きな依頼を受けずに家にいたが、子供が歩き始め少しばかり言葉を発するようになった頃には、彼はまた大きな依頼を受けて家を空けることが多くなつた。

多少の鈍りはあつたがすぐに勘を取り戻し、肉と酒と生死を賭けた戦いの日々は彼を高揚させ、狩りの世界はハンターという人種を逃しはしなかつた。

暗転したのは、些細といえは些細な、売れっ子ハンターの職業病のようなものが原因だつた。

ハンターの特性上、彼は家にいる時間がそう長くはなかつた。「亭主元気で留守がいい」とは言うが、彼の妻はそれをよく思わなかつた。育児を妻一人とアイルーに任せ、彼は気の合う仲間や友人と好き勝

手やっている。

もう少し家庭を顧みてはいいのではないかと何度となく相談したが、なまじ成功したハンターであった彼への依頼はそんな事情を考慮などしてくれない。

ある時、依頼を終えた彼が愛する家族の待つ家へと戻ると「実家に帰ります」と書き置きを残して妻が家を出ていた。遂に堪忍袋の緒が切れたのだ。

焦った彼は急いで荷物をまとめ、家を屋敷守のアイルーに任せて妻の実家の方へと行く船便へ飛び乗り妻の後を追った。

しかし妻の実家に着いても妻も子供もそこには居らず、義父母も「娘は帰ってきていない」と本心からそう言った。

船便で移動したので天候次第で所要時間は前後する。どこかで追いついてしまったのかと義父母の家で過ごし、妻の機嫌をとる方法を考え抜いた。

それなのに彼が待てど暮らせど妻と子供は現れない。

義父母の家には子供を連れて帰る旨の手紙が先着していたし、実家に帰るつもりではあったのだろうとはわかっていた。

船便が遅れるにしても限度があると思えるほどの日数が経過し、もしや妻はこちらに向かっておらずただの家出だったのではと、彼は自らの家に一度帰った。

彼の家は留守を預けた屋敷守のアイルーが掃除をした以外なにも変わらず、妻も子供も帰ってはいなかった。

いよいよもって大混乱になった彼は、自らの実家と養父母の家と知りうる限りの親戚や妻の友人に宛てて至急で便りを出したが、それらの返事が家に届いても妻と子供の行方は知れなかった。

そこまできて、ようやく、彼は妻と子供の行方を知った。考えたくなかつた最悪の形で。

妻と子供が乗船した船便が謎の黒い飛竜に襲われ、沈没していたという知らせであった。

奇跡的に生き残った船員がどこぞの岸に流れ着きその報告をしたのだ。

とある船便が消息を絶つたという情報は知っていたし、それが妻の実家の方角行きの船であったことも知っていたし、彼の妻子が乗船していてもおかしくない日の船便であったこともわかっていた。

消息不明となった船の出発前名簿に名前が残っていたのも、わかっていた。

生き残った船員の証言が確証となった。

あまりにも陳腐な、ありふれた獣害の、大きなニュースにもならない、ただただ運の悪い使い古された死別。

諦念し忘我し慟哭し暴食し深酒し当たり散らして、彼の精神が収束するまで一年余。

立ち直るきつかけとなったのは、かの黒い飛竜の正体が判明したからであった。

ただ、敵討ちとはいかなかった。

彼がそれを知った時点において既にその飛竜はとあるハンターに討伐され、またその成体であった古龍も同じハンターに討伐されていたのだ。

やり場を失った怒りは彼を衝き動かし、足をシナト村へと向かわせた。

黒蝕竜ゴア・マガラ、および天廻龍シャガルマガラ。その言い伝えと討伐された時の話を深く噛み締め、願い倒し拝み倒して集中的にシナト村の依頼を受ける見返りを提示して、優れたハンターさんなのでから一度だけだと禁足地へ入ることを許された。

その禁足地で黄昏ていると、話に聞いていたよりも一回り小さな白い龍、シャガルマガラが飛んできたのは、彼らにとって幸運であったのか不運であったのか。

少なくとも彼にとつては、極めて幸運な話であった。

のちに彼はその時の気持ち^{したた}を義父母への手紙へ認めた。

いわく「顔の弛み^{ゆる}を抑えられなかった。天啓とすら思えた」と。

未知の敵。それも古龍種。

1人で挑むには無謀極まりない敵。

彼は臆することなどなかった。

直接の仇ではないのかもしれない。しかし一生に何度とも出会えない古龍、その同一種。

やつあたりの相手としては、これ以上ない。

ここで戦うつもりなどなかったから、大したアイテムは持ってきていない。

いっそ敵わず討ち死にしてもいい。そんな心持ちで彼は挑みかかった。

彼は狂気に取り憑かれて、勝利した。勝利してしまった。

勝利しても胸の中が埋まることはなかった。むなしいとも思わない。

2度目のシャガルマガラの到来とその即時討伐はギルドにも驚きをもって迎えられる。

ギルドからの事情聴取に訪れた白髪青鎧のハンターには「お前の目が怖い」と言われたが、彼に自覚はなかった。

彼の知人は語った。「あいつはあそこから決定的におかしくなった」。

彼の第二の人生が始まった。

光のない昏い目で、切迫するような義務感に駆られて。

東に黒蝕竜あれば急行して討伐し、西に変異した黒蝕竜あれば韋駄天のごとく駆けつけ平らげ、北に病罹る獣あればそれを根絶するまで寸暇を惜しんで剣を振り、南に鋼のごとき暴竜あればそれを貫く。

古龍種というわりにゴア・マガラの日撃情報は多く、半ば諦めたように名指しで依頼を持ってくるギルドの担当は、ゴア・マガラ出現は最近になってゼロから急増しているため息をつく。

彼にとっては好都合。仇がいくらでもいる。

妻子を奪い、病を撒き散らす古龍など、滅ぶべきだ。

彼の姿も次第に昏く黒くなっていく。

仇である黒蝕竜のものを身につけることに抵抗はなく、撒き散らさ

れる黒蝕竜の病に強いのであれば使わない手はなかった。

その病を薬として服用し自らの力とすることができると、彼は喜んで常用した。

あまりにも多用するものだから知人が止めさせようとしたが彼は聞く耳を持たず、これは共食いだ、と冗談ではない声色で言つてのける。

あまりにも黒蝕竜や変異種を執念的に狙い続けることから、彼は心ない同業者からは俺らの分まで狩るな自重しろとまで言われる。

すると彼はその者を狩りに同行させ、懇切丁寧に入念に入念に、培つた技術と経験を惜しげもなく伝授する。

それが3人であれば3人に、7人であれば7人に、門外不出にする者も少なくない技術と情報を嬉々として明け渡す。

彼はレクチャーが終わつた後にこう結ぶ。

「狩れる者が増えれば、あれが減ぶのも早くなる。あれは滅んでいい龍だと考える。だからいくらでも教える。連れて行く」。

彼の衝動は止まない。

天廻龍が目撃されたがどこかに飛び去つたと聞けば行つて痕跡を辿り寝ぐらを襲つた。

もはや根拠地となる家はなく、彼の休息は移動中のみである。

酒飲まず博打打たず街へ村へ山へ平原へ沼地へ凍土へ溪流へ、濁つた目でマガラ種が撒き散らすものの後始末。

たった1人の徹底した駆除人からギルド経由で送りつけられる大量のサンプルと執念の討伐報告は、病禍の蔓延を明確に抑えたと龍歴院に評価され召喚された。

彼はその功績を讃える賞状を一読すると、そのまま記憶から抹消してこつそり紙ゴミに捨てて帰つた。

いつ頃からか、彼の目からは光が失われる。

完全なる失明。

しかし彼は「書類が見れない」とボヤきながらも何事もなく狩りを続けた。

彼の肌には暗い色が差し始めていた。

それは明らかに狂竜症と触れすぎたからの変化だったろう。

齡50を過ぎても、彼はまだ現役を続けている。

髪と髭は早くも真っ白になったが目以外の体は元気なものだった。

彼の名はどこぞの子供ですら知っている。

諸国を漫遊する竜人の吟遊詩人が広めたもので、決して華々しくはないが悲劇性のある彼の話は良い飯の種。

ある時彼は激しい動悸に襲われ、吐血した。

人の血というにはあまりに毒々しい紫色の吐瀉物。

そして細かな結晶片。

その後も何日も動悸と嘔吐を繰り返して彼は自らの死期を悟り、龍歴院を訪れた。

「もう限界だ」

「なにを弱気なことを。君の目的はまだ達されていないだろう」

「体の中から、黒蝕竜が呼んでいるんだ」

「奴が呼んでいるならとうの昔に出てきているだろうよ。君は何年狂竜症の感染源に触れていると思っっているんだね」

「ああ、もうすぐそこにいる。怖いよ。こんな気持ちはいつぶりだろう」

「依頼があるぞ、ゴア・マガラの変異種が出たという陳情だ。君宛で昨日届いたばかりのものだ」

「そうか、それは行かなければ」

「そうだ。それでこそ君だ」

彼は明らかに死相を浮かべ、体も一回り縮んでいた。

上長は彼を殺そうとしている。

そう言っ止めに入った職員がいた。

しかし彼を深く知る者は皆一様に首を横に振り職員の方を止める。

彼は当然のようにその依頼を受けた。

誰の目にも死神に取り憑かれていると見えた彼は、龍歴院の多くの職員をして、今生の別れ、死出の旅となるだろうと予想し、死体を回収するためにこっそりと人員を送ったほど。

それでも彼は大きな怪我もせず依頼を達成して龍歴院に帰ってき

た。

ただし、担架で。

「防具が重いんだ。どんどん肉が落ちて、もう武器も持ち上がらないんだ」

「なにを言っている。その歳で大剣など振り回しているからそうなるんだ。片手剣を用意しておくぞ、次の依頼に行つてこい。今度は普通のゴアのおそらく若个体だ。判別方法は君が見つけたものだぞ」

彼はその依頼も受けて、やはり達成して帰った。

担架に乗せられ、大きな怪我を抱えて。

彼の体からは、朽ちるような死臭すら漂っている。

気力で生きていると評するのも憚られるような生きる屍状態に、彼を止めようとした職員は言葉を失った。

「もう限界だ」

「そうか。ならば後進を育てることだな」

「なら教材に俺の体を使え。見たか俺の骨。狂竜結晶が生えてたぞ」

「狂竜症に罹患したモンスターの内臓や骨に狂竜結晶が生じる例は多い。人の体で同じことが起きてもおかしくはないだろう」

彼は小さく笑う。

「俺の体を無駄にするな。細切れにしても調べ尽くせ。標本にするなら好きに使え。遠慮なんかするな。研究者の本質を見失うな」

そうして彼は逝った。享年56。

20年以上もの間、狂竜症と文字通り戦い続けた狩人の死であった。

彼の体は本人の遺志を尊重して研究に回された。

内臓や骨にはトゲのような狂竜結晶がびっしり生え揃い、なぜ動いていたのか不思議なほどであった。

ゴア・マガラの子実体と思しきものまで発見され、改めてかの古龍の異常性を際立たせる。

頭蓋骨にはゴア・マガラの触角と思われる器官が小さいながらも内蔵されており、彼が失明してからも戦い続けられた理由のひとつとして推察された。

彼のような体になるはるか前に、人体は機能不全を起こして死んでしまう。

症例を鑑みるに、体内に狂竜結晶ができた時点で激痛があつておかしくないのだ。

にも関わらず、全身あまねくびつしり狂竜結晶を生やしていた彼はそんなことをおくびにも出さなかつた。

彼は人であつたとすら怪しい領域に踏み込んでいたとしか思えない。

健康管理の賜物なのか気力執念憎悪らによるものなのか結論が出ることは永遠にない。

彼の体から得られた情報は残念ながらあまり役には立たなかつた。

それでも、彼の変異した頭蓋と狂竜結晶の塊と化した臓器や骨は、貴重なサンプルであることに変わりない。

全身で研究の糧となり一部を保存されそれでも残された彼の体は、感染源とならぬよう入念に焼却され禁足地の一角に弔われた。

彼は幸せな生涯を送つてはいないだろう。

その功績を誇りもしなかつた。功績とも思つていなかったはずだ。死した彼の魂がなにを求めるのか、誰にもわかりはしない。

悪風吹き上がり

「彼」は孤独を自ら選び続けた。
「彼」は黒蝕竜の姿を追い求めた。
「彼」は多くの病原体を狩り続けた。
「彼」は狂竜症の感染拡大を否とした。
「彼」は功績を誇らず眼中にもなかった。
「彼」は挑んだ黒蝕竜に生涯負けなかった。
「彼」の原動力は病的な執着力と怒りだった。
「彼」は黒蝕竜絶滅のために全てを投げ打った。
「彼」は目の光を失おうとも戦いを辞めなかった。
「彼」の遺した情報は後進への大きな財産になった。
「彼」が遺した黒蝕竜の出現傾向予測は被害を防いだ。
「彼」は結果として多くの民を救っている。
「彼」の非業の生き様は竜人の吟遊詩人が謳う。
「彼」に魅せられた者が出るのも当然のことである。
「彼」の背中を追うことは既に叶わない願いだとしても。
「彼」が世につけた痕跡は決して小さくないものなのだから。

彼女が幼い頃、黒蝕竜によって一家が崩壊した。

アプケロス引き竜車で一家移動中に襲撃を受けて父母妹が鋭爪に裂かれ絶命し、濃密な狂竜ウイルスによって黒くなっていったのを覚えてる。忘れようとも忘れられない。

彼女とて見逃されたわけではなく、一撃のもとに散華しなかっただけで大きな傷を負い狂竜症も受けてゆるやかに死を待つ。

そんなときに「彼」がやってきた。

全身黒の出で立ちだが頭髮は真っ白。大きな幅広の剣を担いでいた。

ほとんど入れ違いになった「彼」は大いに悔やむ。

死にかけている彼女へ「彼」は問うた。
「いますぐ適切な治療を施せば君は快復するだろう。
しかし君の家族は亡くなっているようだ。
きつと幼い君のこの先の人生は辛いものになる。
その傷の深さでは大きな傷跡も残るだろう。
近いうちに仇のあの黒蝕竜は必ず冥府に送り届けよう。
この世に未練がないなら、苦しませずに家族の後を追わせることも
できる。」

君が生きたいなら治療して近くの病院まで届けよう。
どうする？

彼女は生きることを選択した。

「彼」は宣言通り治療を施して近くの病院まで彼女を届け、10日と経たずに黒蝕竜を討伐したと見舞いにやってきて、証拠に真つ黒な分厚い鱗と折れた太い触角を残して去った。

あとで聞いた話だが、家族の死体は油をかけてまで入念に焼却消毒されていて、彼女には骨の灰しか戻らなかった。

彼女の治療費は「彼」が黒蝕竜の亡骸を然るべき場所に売り払ったお金が使われており、余ったお金は彼女の手に。

「彼」が危惧したように彼女の人生は楽な道に行かなかった。

養つてくれる家族親戚はおらず、歳は13かそこいら。顔を含めた左半身に怪我と縫合痕。

そんな状態で自らを食べさせられるだけの職を、となれば彼女もやはりハンターとなった。

彼女のハンターとしての技量は高くない。

歳が若いのもそうなれば単純に体もできていない。

鍛えなければ武器に振り回されるし、駆け出しゆえに比較的軽量の防具ではあつてもまだ着せられている感強い。

光る才能の片鱗を見せることもない小粒の素材。

彼女に年不相応なところがあるとするれば、身の程をわきまえていたことだろう。

無謀に飛竜に挑みかからず、肉食竜に囲まれば逃げ一手。

今はまだ体を自由に操縦できないとちゃんと理解していた。無茶をしないことは狩人にとって美徳である。

同年代の者からはその姿勢を消極的と侮るが、彼女を侮った若者は数年以内になにかしらの大きな怪我をしでかした。

本場に地道に成長を重ねた彼女は同期より遅い昇進を続けた。

同年代が毒怪鳥に挑む頃、彼女は大猪を倒した。

同年代のパーティが雌火竜を制した頃、彼女は怪鳥を転がした。

同年代が鎧竜に挑む頃、彼女は盾蟹を撃破した。

同年代が轟竜や角竜に追いかけて回されている頃、彼女は魅惑色の電竜を打倒した。

同年代がぼつぼつ上位に上がる頃、彼女は岩竜を砕いた。

概ね単独で依頼を受けていたのは誰に似たか。

竜人の吟遊詩人が弔い歌を唄う。

生涯大怪我をせずも幽鬼と成り果てた今際の姿。

それでもなお2頭の黒蝕竜を道連れにした執念の塊。

死した彼の魂はなにを求めるのかと。

化けて出るなら黒蝕竜の寝首を溜め斬りで搔くだろうと彼女は思う。

彼女は「彼」の死を吟遊詩人の唄で知ってから飛躍する。

「彼」が遺した資料は上位ハンター以上であれば龍歴院で閲覧可能という。

無理をせず日々の暮らしをそれなりに充実して過ごせるだけの稼ぎがあればいい。

安定志向だった彼女に目標ができた瞬間である。

齢22。体の成長は落ち着き肉もつき運動能力の把握もできて、ハンターとしての成長期が訪れていた。

雪獅子を鎌蟹を迅竜を雷狼竜を化け鮫を水竜を炎戈竜を、無茶をしつつ幸運にも大失敗せず立て続けに大物を狩り続けいざ上位昇格試験。

なんの因果か若い黒蝕竜狩猟を斡旋された。

彼女の奥底で明るい火が灯る。

意識しないほうが無理がある。

それを受注してみるとギルドからちよつとした紙束が渡された。

題字『黒蝕竜の心得』。原作者は彼女を救った「彼」だった。

記されていたのは「彼」による黒蝕竜の徹底的な解析。

くるであろう攻撃とその対処があらゆる形で網羅され弱点部位の指定とその狙い方すらも書かれ、初見であろうとも必ず殺せるようにという殺意の文章が何ページも続く。

めまいのするような情熱と怨念。

この殺意の手順書があつても実際どこまで現場で戦いながら活用できるかは人によるだろう。

彼女にとつては恩人からの強烈な後押しである。

そして彼女は自分の戦い方というプライドを放り投げこの手順書の指示を忠実に守った。

読み込みが足りず時々で危うい場面はあつたが、初見で古龍の幼生体を相手にギリギリの場面には出くわさず黒蝕竜狩猟を完遂した。

家族を殺め大怪我を負わされた相手だが終わってみても彼女に感動も達成感はなかつた。

手順書ひとつでああも思い通りにいくものかと、こんなに弱いのかとすら思ったぐらい。

晴れて上位ハンターになった彼女は新たな段階の狩猟に出るよりも先に龍歴院を訪れる。

「彼」の遺品である資料を閲覧するために。

いびつに変形して紫黒に変色もしている「彼」の物言わぬ髑髏。

狂竜結晶が無数に生えた肋骨と肝臓。

人骨なのに変形して鋭さのある手の指先。

変わり果てた恩人は骨になつてもあの時と遜色ない殺意を残しているように感じる。

これを触媒に生きる人形を作ればすぐにでも黒蝕竜を殺していくだろう。

彼の手記も保存されていた。

途中から代筆者がそれを書いており、彼女を助けたことも書いてあった。

発見と到着が遅れたことを手記でもとても強く悔やんでいた。

狂竜症に村全体が冒され焼かなければいけないことがなかったこと。

依頼を受けて行ってみれば依頼主は狂竜症で亡くなっていたこと。

ポポの牧場で狂竜症が流行し全頭処分しなければならなくなつて牧場主と殴り合いになつたこと。

狂竜結晶が「彼」の体内に生成され激痛でのたうち回つたこと。

快癒の見込みがない狂竜症患者から殺してくれと頼まれたこと。

楽にしてあげると家族からも頼まれて「彼」が手にかけてしたこと。

狂竜症で完全に正気を失い暴れる人を殺したこと。

それについて遺族から突き上げを受けたこと。

ギルドからも殺人で突き上げを受けたこと。

一方でギルドナイトからは勧誘を受けてそれを断つたこと。

「彼」は復讐者であると同時に狂竜症の専門家でもあつたということ。

マメだったのか発生理由からその対処まで逐一書かれている。

手記を読み進めただけで相当狂竜症への理解が深まった気がする。

先の黒蝕竜狩猟の際に渡された手順書と一部被る内容があり、これは誰かに読まれる前提で書いていたのではないだろうかという疑問が浮かぶ。

手記とは別に狂竜症を発症したモンスターの変化を「彼」なりにまとめた観察帳のようなものもあつた。

軽い気持ちで読み始めた彼女はこれがとんでもない宝だと認識を改める。

「彼」が相対したありとあらゆる狂竜化モンスターをどのような手段で狩猟すれば上手くいくのか、独自の観点からみっちり記した技術書に近いものであつたのだから。

彼女には斡旋されないモンスターの記述も数多く、「彼」の実力がいかに優れていたのかを間接的に知る。

黒狼鳥と碎竜が狂竜化した時は「彼」も手を焼いたらしく1対1は正気の沙汰ではないとまで形容して、仲間を集めて拘束手段をフル活用して短期決戦に挑むことを推奨していた。

轟竜と金獅子は病状が極限フェーズに進行すると大きな街すら襲うほど獰猛になるので狂竜症罹患個体が発見されたら症状が進行する前に特に迅速に処理すべきとしている。

重要度は落ちるが極限フェーズまで進行した雷狼竜や紋蛇竜は敵にしたくないと愚痴も洩らしている。

「彼」の警告は活かされているのだろうか。

これらと相對することがあれば全力で逃げようと彼女は心に誓ったので、彼女の役に立つことは決定された。

持ち出すことは禁じられていたが書き写すことは許可されていたので、彼女は足繁く龍歴院を訪れ「彼」の遺した技術を写本した。

これが必要な人に広まらないのはあまりにも惜しい。

それから3年余。

彼女は大怪我歴のない綺麗な体で上位等級を卒業した。

「彼」の技術論を完全消化して自らの糧とした結果。

同年代で最も早い出世になっていた。

彼女を消極的と侮蔑した者達は啞然としていたが意には介さない。

しかし彼女はここの段階で向上心を失った。

「彼」が名指しで強敵認定した狂竜症の黒狼鳥と相對して、實際どの程度かと自分の実力を試すつもりで挑みかかった。

防戦一方大怪我せず撤退できたのが奇跡という有様。

心が萎えた。

「彼」が名指しした強敵との1対1は正気の沙汰ではない。

「彼」本人が正気ではなかったから始末に負えない。

なにをどう狂えば単独であれを制し続けられたのか。

死ぬ直前まで大怪我しなかった意味がわからない。

彼女の英雄はやはり化け物であった。

心が萎えたからといって技術が鈍るわけでもなく。

安定した収入を得られるほどの腕がある。

食えればいいが彼女の原点。

金も相当ある。

彼女は「彼」の理念を継いだ剪定係となった。

将来極限フェーズに達したらマズイことになる個体を単なる狂竜症のうちに潰す。

黒蝕竜は力量が届く範囲なら仲間を募って急行、『黒蝕竜の心得』を
実演していかに楽になるかを説く。

手に負えない黒狼鳥と碎竜はもつと上の人に。

彼女もまた家族を持ち子を孕んだ。

しかし剪定係を買って出たがゆえに蓄積された狂竜症の毒素は彼
女の体を汚染していた。

子は死産。体内で狂竜症に胎児が負けていた。

さらに2度と子を産めない体にもなっていた。

「彼」すらも知らなかったこと。

男であったし復讐鬼となつてからは独り身。

発想がこれに至るとは思えない。

彼女は運命を嗤った。

彼女は手始めに、「彼」が調べなかったであろう狂竜症と女性の関係を
洗った。

出てくる出てくる狂竜症に負けた胎児の話。

妊娠初期の罹患であればかなりの確率で流れる。

安定期だと産まれた子に障害が出やすい。

後期だと死産になりやすく母体へのダメージも大きい。

過去に罹患して重症化していると何事もなく健康な子供を産む率
も下がる。

流れた子に狂竜結晶が付着していた例すらあった。

あんな棘だらけの結晶が子宮にあればさぞ母体へのダメージも大きかろう。

一方で旦那だけが罹患した例を調べてもそれらしい影響は発見できず。

狂竜症は胎児に成長阻害効果を持つ様子。

もしかすれば最初の黒蝕竜の襲撃の時点で母体としての彼女は手遅れであったのか。

女としての未練が風に吹かれてどこかへ飛んでいった。

彼女は「彼」の歩んだ道を進むことにした。

その最期が苦痛に満ちていると知っていても。

どうせ「彼」が生かしてくれた命なのだ。

黒蝕竜を殺そう滅ぼそう。

狂竜症は滅菌しなければ。

それが「彼」と腹を痛めた我が子への恩返し。

かくして彼女は狩人に復帰しもうちよつとだけ上を目指した。

「彼」ほどの狩猟技術は持てないが、もうちよつとだけ押し出しを良くするために。

歳40も近くここから先は肉体的に衰える一方であるのだから動けるうちに上がっておく。

彼女の旦那は元旦那になった。

子は産めぬ旦那を愛すより亡き者の背を追いかけているでは愛想もつきる。

なるべく高めた実績を手土産に彼女は龍歴院の戸を叩く。

狂竜症が妊娠に与える悪影響への周知を目的として。

「彼」がいたからこれへの理解がはやい。

開拓村や女性ハンターにとつては非常に重大だから。

ハンター協会への働きかけも丸投げる。

正確な証拠集めも丸投げる。

一個人が提起するより学術に優れたところに発表させたほうが説得力がある。

あとは「彼」と同じだ。

草の根分けても黒蝕竜を探して倒す。

狂竜症に罹患したモンスターを倒して龍歴院に研究資金を注ぎ込む。

平行して後進のハンターに狂竜症の危険を説く。

実績と実体験と資料の合わせ技で信じてもらう。

齢45を過ぎて遂に到来した体内からの激痛。

骨か管か臓器にできた狂竜結晶が暴れる。

口から結晶混じりの血を噴いて病院に担ぎ込まれる。

医師は首を横に振った。

結晶が生えた位置が悪かったらしい。

「そうかあ……」

中途半端な狂気の染まり方では「彼」よりも寿命が短くなるのか。

「黒蝕竜に負けたなあ」

成し遂げられたことは本当に小さい。

彼女は狂竜症との戦いに敗れた。

彼女が背中を追った「彼」は黄泉路でどう迎えてくれるだろう。

「勝って死にたかったなあ」

誰かが黒蝕竜と狂竜症の危険性を警鐘し続けてくれることを願って彼女は逝った。

享年46、狂竜結晶が体内に発生したことによる動脈破裂が直接の

死因だった。

彼女の死体は家族と同じ入念な焼却が施され弔われた。

狂竜症と戦いほんのすこし爪痕をつけた死であった。

さよならラオートさん

セクメーア砂漠近くの街で余生を過ごしていた高名なハンター。
82歳での死去。脳卒中による突然死。

周囲は老衰みたいなものだろうと語っていた。

いまはもういなくなっただけと思いき砂獅子の鎧を着込み。

これまた昨日目撃情報のない蒼い老山龍の重弩を担ぎ。

数多のモンスターを狩り果たした、街きつての出世株。

「歯応えのある奴が砂漠にいなくなった」

G級と称される等級の中でもさらに上澄み、約30年の長い全盛期
を迎えていた間、大陸屈指のハンターとして名を馳せていた。

多くの若者が追い返された繁殖期のディアブロス夫妻を笑って一
蹴し。

どこからか漂ってきた鋼龍は2日保たずに砂漠を追い出され。

炎妃龍炎王龍の連続来訪で街崩壊の危機が騒がれるも、炎妃龍斃さ
れ炎王龍は角折られ翼を風穴だらけにされてどこかに走って逃げ
てった。

其の者のオトモアイルー（既に逝去）はその時のことを述懐してい
る。

ご主人が顔面ボコボコにしてて、美味しいとこだけ手柄譲っても
らっただけニヤ。

月刊『狩りに生きる』 — 往年の名ハンター、砂漠の守護神編 —
より抜粋。

その老ハンターには歳の離れた弟子がいた。

正確にはその老ハンターにしか御せなかつた弟子がいた。

その弟子は、あまりにも純粋な戦士の才に恵まれていた。

その子は母の腹にいた時から異様に育った。

やけに膨れた腹に育ち、その両親は双子か三つ子かと思ったほど

に。

その実腹の中でひたすらに巨大に育っており、産まれた姿は赤ん坊とは程遠い重さと骨太さであった。

その赤子は実によく食いよく眠りよく育つ。3歳の頃には3つ4つ上の世代と背丈も変わららず、その中に混じって遊んでいた。

さらに異様であったのは、その育ちが全く止まらなかったことだろう。

背丈は6歳をして周りの子供達の倍近く、体格では既に大人の仲間入りを果たしていた。

しかし精神は年相応でガキ大将そのもの、体格が良いだけに、実に面倒な悪ガキになっていた。力を持て余していたのである。

もはや両親では手に余ると感じた村長は、セクメーア砂漠で余生を過ごしていた老ハンターに才ある若者として預けることにした。

その時8歳、既に背丈も体重も老ハンターを超えている巨軀。ブルファンゴと力比べができたほど。

預けられた当日にウザがつて老ハンターに殴りかかり、半日かかってスタミナが切れるまで全部避けられ続け、かすらせることすらできず。

コンガでももうちよつと当てるとすら言われてようやく弟子入りを承諾。

老ハンターがその子に提示したのは、正しい体の使い方を見せてあげたことだった。

動きの癖を矯正し、運動しても怪我しない体を作り、目の使い方を教える。それだけだった。

人に向けて振るうには過ぎた体格と膂力。ハンターに預けられたならハンターになるのが道理。

手始めにハンター用の回避の体捌きを教えたら、軽く老ハンターの倍は移動する瞬発力と筋力。

体が成長が止まる気配を見せない以上、老ハンターは下手にトレーニングを課すことはしなかった。

そもそも、セクメーア砂漠をハンターとして生きるために必須の技

能である、柔らかな砂上をダッシュし続ける行為そのものが強烈なトレーニングである。

ガレオス種が泳げるほど踏ん張りのきかない砂上において身体能力をフルに活用する術を体得する、それそのものが十二分に弟子の体を適切なものに育てるであらうと考えた。

老ハンターはまずはヴァイパーゲネボスの片手剣バイトを与えて、盾蟹を相手に攻防の駆け引きを教えようとした。

しかしその身体能力では盾で防ぐまでもなく大概避けることができ、その膂力であらゆる方向から一方的に殴りつけるそれでヴァイパーバイトはあっさりへし折れた。

これはダメだとボーンク盾蟹のランスランスを与えて、今度こそ盾蟹を相手に攻防の駆け引きを教えようとした。

前提として、ランスは正確に弱点を抉り、傷口を広げていく武器である。

それを甲殻の隙間に抜けなくなるほど深々と、それもあっさりと突き刺して、相手の攻撃を避けながらランスの盾で殴打し杭打ちする武器ではないのである。

そもそもランスは抜けなくなるほど突き刺さるものでもなければ、盾が槌代わりにできるほどのサイズでもない。

積極的な防御という概念はこの弟子にはいらぬのでは。一方的に攻め続けられるならそれでいいのではないか。

そう思ってブレイズ鉈石の大剣ブレイドを与えて、突き刺さないように厳命して、三度目の正直で攻防の駆け引きを教えようとした。好きに攻めていいがいざとなれば大剣で受け止めろと。

しかし本当に8歳なのかと疑わしい、太刀もかくやという勢いで振り回してモンスターに挑みかかり、重さよりも刃で叩き斬ることを苦にし、途中で諦めて当たればどこでもいいかで側面で殴りだす。空気の抵抗はないとばかりに。

身体能力が勿体ないとは思ったが、弓と重弩も試させた。

弓ではろくすっぽ的に当たらず、重弩では狙いを定めるという行為自体を面倒と忌避したので、向いていないと選択肢から外した。

狩猟笛も試させたが、自己強化の旋律による身体能力の著しい強化から繰り出される破滅的な威力の打撃は、モンスターを倒すより先に笛の構造を破壊した。

ともなれば残るはハンマーである。

端的に言えば、水を得たガノトトスであった。

ハンマーの重さなんてまるで気にせず、その重量を優れた身体能力で叩きつける単純にして強力な戦法に、足りないことは経験だけだった。

こればかりは一概に教えられることではないし、天狗にならぬよう自信を喪失しないよう剪定はしなければいけない。

弟子が齢13の時、彼はハンマーを得物に上位等級に昇格していた。

その背丈は既に大人の背すらも頭ひとつ追い越し、セクメーア砂漠近辺ではもう並ぶ者がいない長身になっていた。

ある日弟子が依頼から帰ると、老ハンターは自宅で亡くなっていた。

遺品の中に遺書があり、体の使い方を考え続けろ、武器はくれてやるが師匠の実績を超えるまでは使うな、という二文だけが書かれていた。

人間離れたした体躯から繰り出される運動能力による戦闘力は技術としては完成に程遠い、ハンマー持った人型の獣としか言いようがない戦い方。

避けて殴る。その動作が一般的なハンマー使いの基本軸。

避けて殴る殴る殴る殴る殴るぐらいの動作を彼は同じ時間に詰め込む。

セクメーア砂漠近郊で砂獅子亜種の異名を賜った幼き猛獣が、首輪から解き放たれた瞬間であった。

その背丈はなおも伸び続け齢20を過ぎてようやく止まる。もはや人間としては完全に規格外であり、体を研究したいと言い出す者も

多数。

優秀な師を追うようにハンターとしての実績も伸び続け、遂に彼は大陸屈指のハンターとなる。

あらゆるモンスターを粉碎する力は、剣を持てば人の身で老山龍の尻尾を切断できるかもしれないと噂された。

彼の持つハンマーは特注を重ねて一般的なハンマーの倍以上のサイズと重さを誇り、もはや砕けぬものはなにもないと言ひ、本人も弾かれることなどないと豪語する。

その後も彼はあらゆるモンスターを征し続けたが、遂に彼の攻撃を弾くモンスターが現れた。

ゴア・マガラおよびシヤガルマガラの騒動がひと段落してから現れた、狂竜症の極限フェーズに達した個体である。

あらゆる攻撃を弾く硬く激しい敵に、彼はこれらを真正面から砕くことを目標として率先してその依頼を受けていった。

理外の破壊力と理外の耐性。

抗竜石〔心撃〕が開発されても彼はそれに頼らず、己の力だけで硬化部位に弾かれ、時に硬化部位にすら打撃を通した。

そのぶつかり合いは同行したハンターに生物の出す速度と音ではないと言わしめる。

数多の鉱石で造られた極鎚合金でできた特注のハンマージャガーノートは、彼の荒っぽい使い方と極限個体の硬さに耐え切れず、依頼が終わるたびに毎回どこかがひしゃげ、曲がっていた。

極限フェーズ個体と率先して戦い続けること十数年。

狂竜症と戦い続け、いつしか極限フェーズに達する個体は見られなくなった。

ふと、彼は思った。

「歯応えのある奴がいなくなった」

そろそろハンマーも昔のようには振るえなくなった。

師匠の実績は超えているだろうから、もういいだろう。

蒼い老山龍素材を惜しまず投入した巨砲、老山龍砲・極。

師匠にとつての重弩は、巨軀の弟子にとつて軽弩に等しい。

そして師匠が愛用した砂獅子素材防具のブランゴZシリーズ。

今は砂漠に茶色のドドブランゴが出ることはない。無理な環境適応の後に砂漠の生存競争に負けて淘汰されたのだろう。

武器の反動を大きくする代わりに弾倉を拡張し放熱性を高めるこの装備は、今はもう失われた機構。

是非使いたいが、そのままでは小さ過ぎてとても使えない。

あらゆる伝手を辿り、希少な素材を注ぎ込み装備を当時の性能そのままにリサイズ。

1度装填すれば弾が尽きるまで撃ち続け、大きくなった反動も彼の巨体にはなんなく吸収されて無いようなもの。

常人の筋力では構えて走ること叶わないそれを容易に取り回し、尋常ならざる破壊力をあらゆる状況から止めどなく放つ革命的な変遷。

新たな怪物ガンナーの誕生である。

かつて忌避した狙いをつける動作も、相手の動きが読め、体も安定した今ではその必要もない。

彼にとつて通常弾や属性弾が最大限活きる距離は、ハンマー時代の移動範囲となんら変わらない。

狙いをつけるより接近して連射して離脱する方が、彼にとつては手早く手堅かったから仕方がない。

月日をさらに重ね、彼の年齢は既に60を過ぎていた。

巨体を支え続けた下半身は限界に達しており、何度か手術も行っていた。

かつて狂竜症個体と散々戦い続けたせいかわ、静かに蓄積された狂竜ウイルスは全身を蝕み、いつ急変してもおかしくないという。

そこへセクメーア砂漠で久方ぶりに確認された狂竜症極限フェーズの轟竜。

若いころ鎬を削った相手に懐かしさを覚えた彼は、引退試合のつもりでその依頼を受けた。

師弟二代に渡って使い続けられた防具も相応の年季を重ね、あらゆる箇所が擦り切れている。

老山龍砲もだいぶフレームがガタついている。

定まらない膝、痛む足首、軋む腰。機動力は全盛期の半分以下。耗弱した体は重弩を重弩として扱わせた。

遠い記憶の彼方にある、衰えを経験でカバーしていた師匠の姿。それが今の境遇に重なる。

ぼやけてしか思い出せないが、体には教わった砂漠での立ち回りがしつかりと根差している。

轟竜が砂塵巻き上げ猛然と突っ込んで来る。

高揚と、ほんの少しの懐かしみ。体は流れるように動き、すれ違ひざまに横つ面へ弾丸を叩き込む。

師匠には手が届く範囲でひたすら避けられた。それを再現すればいい。近距離こそがホームグラウンド。

血が騒ぐ。クーラードリンクは服用したのに脂汗が止まらない。

心臓が張り裂けそうなほど大きく拍動する。

なんで今出てくるんだよ、もうちよつと待ってくれよ師匠。

なんで俺は上から狩りを見るんだ。

ほら、狙い所に当てるのも上手くなっただろ。

貫通弾も弾き返す部位に打撃通したんだぜ、すげえだろ。

戦ったことがないからわからないって、そりゃねえよ。

轟竜の咆哮は腹に響くよなあ。砂地がビリビリ波打つのも面白い。ことあるごとに遅れてくる尻尾に気を付けろって、何回聞いたかわかんねえよ。

どうだ、勝ったぞ師匠。

帰るまでが狩猟だって言うけどさ、倒したんだからそっち行っていないだろ？